# ヒマラヤ

# HIMALAYA

1976年3月号

1975年HAAJインドヒマラヤ遠征特集号



# 日本ヒマラヤ山岳協会——HAAJ

HIMALAYAN ALPINE ASSOCIATION OF JAPAN

# ヒマラヤ

実に、 ルの大きさと心の安らぎを与えます。 の足で踏みしめ、 東はブー 31 ロッパ タン・シッキム 自分の肌で感じるワイ ・アルプスの二倍です。 から、 西はガル ルドなトレッキングは、 雄大な八千メートル級の巨峰の連なるヒマラヤを自分 ワール・ラダック、そしてカシミー どのレジャーも及ばないスケー ル と三千 キロ

時間に追われ、人間関係のわずらわ らの求めている超現実的な世界です。 ウット湖の神秘的な静けさ。すべてが彼 花園の美しさ。海抜4865 m、常に の景観。斜面一帯を華やかに色どる 8000m級の巨峰が連なる大自然 の魅力を教えてあげてください。 スマン達。彼らにこのヒマラヤ山麓 出したいと思っている都会のビジネ しさに悩み、たまには仕事から逃げ ダージリン 雪塊や氷塊をたたえているアルハル

東わずか11キロの地点にあるタイガ たちの別荘も多く、 ります。インドの上流階級や外国人 リン」は海抜2134mの高地にあ にあふれた街。このダージリンの南 ヒマラヤのリゾートタウン「ダージ ・ヒルから望むカンチェンジュン (世界第3位) やエベレストの偉 健康的な雰囲気 ダージリンからの途中にあるカリン

シッキム

たずまいを見せています。 キムへ入境することができるように 王宮を中心に神秘の国が、静かなた 現代の「桃源境」とはここのことです。 なりました。観光客のほとんどない ごく最近まで鎖国状態であったシッ

なリゾート。買物も楽しい思い出にポンの町も、長期滞在に向いた静か 詳しくはエア・インディアにお問い のビザとは別に特別許可が必要です。 なるでしょう。 合せください。 [註] シッキム入境の場合はインド

高山植物の宝庫、花の谷、や4000の聖地をたずねるトレッキングや、 ジス川の源流近くにあるヒンズー教 年7月から外国人に解禁されました。 ガルワル地区は、デリーの北東約 ガルワル・トレッキング mをこす山岳湖への旅が楽しめます。 ナンダデビー(7816m)や、ガン 400キロの地点にあり、1974

る人の心に衝激にも近い感動を与え 観は、文字通り世界最高のもの。見

ずにはおきません。





世界の35都市をネット する

京●千代田区有楽町日比谷パークビル〒100☎214-7631 阪●東区備後町松豊ビル〒541 ☎264-1781 名古屋●中村区堀内町ホテルニューナゴヤ〒450☎581-5876 広 島●鉄砲町1-20第3ウエノヤビル〒730 **☎**28-7211

# 1975年HAAJヒマラヤ遠征特集

#### 日印合同カシミール・ヒマラヤ遠征隊。ガルワール・ヒマラヤ遠征隊

1973年にネパール・ヒマラヤのカンジェラルワ遠征隊以来, HAAJの派遣した 4 つの遠征隊がすべてユニークな地域で地道に成果を上げ, 無事故で活動を終えていることは喜ばしいことです。1975年両隊の動きは既に「ヒマラヤ」誌上で刻々お伝えしてきましたが, ここに遠征のあらましを帰国速報として総集しました。

# 1975年日印合同カシミール・ヒマラヤ遠征隊

遠征実施にいたるまで

#### 計画の成立

インド,特にカシミールとHAAJとの関係は, 1971年のカシミール隊によって強化された。その 後,ハスナイン博士を軸としての交流が活発とな り,HAAJの専門研としてのラダック研究会はそ の中核となって継続的な活動がなされてきた。

カシミール・ヒマラヤの盟主、ヌン・クンへの 遠征が意識されたのは当然の成り行きであった。 しかしながら、インナー・ラインによって通常の 方法では実現不可能であることから、仲々現実化 されるに至らなかった。1974年のラムジュン・ヒ マール遠征が決定され、精力的な準備が成される と共に、その次のプランをどうするかが問題になっていた。1973年9月の富山ヒマラヤ集会ではラ ダック研担当の空理事から初めてヌン・クン遠征 計画が提案されたが決定には至らなかった。1973 年末のラムジュン隊強化合宿でのミーティングで は更に熱を帯びて計画が検討された。そして1974 年2月の河口湖研究会で1975年実施がEXP研グ ループ内の意向として決定され、その年のHAAJ の総会で正式に承認された。

折から沖(前専務理事)はインド留学中で、カシミール側関係者との接触を通じて非常に有効な情報をもたらしていた。当初提出したHAAJ単独隊による申請はインド山岳財団(以下IMFと記す)から却下された。残る方法はカシミール登山局との合同隊であったが、種々の面倒さが予想された。しかし、合同隊の試みは今後のHAAJにとって有

効な方策であるという大局的見地に立って検討された。その結果、困難を承知で合同に踏みきり、カシミール側に主導権をおく形で許可取得に当ることになった。7月下旬に総括責任者の清水澄がインドに飛び、沖、空らと共に合同に関する具体的交渉を行なった。日本側予定メンバー表が渡され、以後IMFとの交渉はカシミール側に移行された。

#### 定まらぬインド側の態度に苦慮

10月、増田専務理事がカシミール側責任者と会談、正式許可がこの月にIMFから交付された。公募した隊員の選考がなされ、11月以後具体的な準備が開始された。しかし、日本側にとってはカシミール側の意向がもう一つ不明であり、合同に関する詳しい取り決めも遅れていることが準備上の障害であった。それに当時平行して進められていたガルワール隊の許可が仲々下りないという悩みもあった。これらの局面打開のために、両隊総括事務局の稲田定重理事が12月末に訪印した。登山局長との間に詳細なアグリーメントが締結された。カシミール側メンバーが未決定であることは不安であったが、準備は進めなければならなかった。

しかし、1974年3月に至り、合同そのものが空 文化するような重大な計画修正がカシミール側か らもたらされた。けれど、この時点では隊荷の調 達、梱包は完了し船積に入っていた。ともかくタ クティクスに関しては急ぎ修正された。

#### 出発の大巾遅れ

日本側隊員は4月下旬に羽田を発つ予定であった。ところが思いもかけぬインド・ビザ(入国査証)に関してのトラブルが発生し、出発に待ったがかけられた。局面打開の方策は種々なされたがダメであった。しかし、後にガルワール計画をひかえて装備の共用が予定されていたので、いたずらに待つわけには行かなかった。5月11日西郡隊長が解決のためにインドに向かった。デリー及びカシミールで考えられる限りの努力がされたが

事態は非常に困難であった。全員のビザが下りたのは7月7日であった。7月17日に本隊は漸く出発にこぎつけた。この間、実に長い日々であった。出発の遅れは登山期間の縮少に結びつき、現地での登山行動にはかり知れない影響を与えること

になった。

以上の経過を通じて、合同隊の難しさ、渉外の 方法など数え切れないほどの教訓を得ることが出 来たが、これらは、いつかきっと生かされる機会 もあるものと思う。(遠征隊事務局 稲田定重)

# 1975年日印合同カシミール遠征隊

概要報告(1)……主として先発隊の行動

#### <はじめに>

1975年,日本・インド合同カシミール遠征隊は, 1974年 10月10日をもって全隊員が無事帰国し,隊 の活動は一応終了しました。現在,国内での残務 整理を続けておりますが,この遠征の準備を含め て,登山活動から帰国に至るまで,HAAJ会員の 皆さんをはじめ関係各位からなみなみならぬご協 力,ご援助をいただきまして感謝の言葉もありません。

特にこの遠征では準備段階から予想しなかった 障害に遭ったうえ、登山では目標としたヌンの登 頂を果せずに帰国しなければならなかったなど、 ご期待に添えなかった点は、はなはだ残念で、力 不足を反省し、申し訳なく存じております。

慰めと申しては失礼ですが、この遠征を通じて 得たさまざまな経験を、今後のHAAJの活動や、 日常生活の中で少しでも役立つものにしようと全 隊員が確認しつつ帰国したことでありました。

この遠征に際して寄せられた各位ので好意に改 めて感謝を申し上げつつ,以下遠征の概要報告と いたします。

#### <隊の構成>

隊 長 西郡光昭 35才

副隊長 (登攀隊長) 山森欣一 31才

隊員 田中重義 28才

保 坂 昭 憲 28才 山 田 正 弘 28才 清 水 正 雄 27才

鈴木康志 23才

インド側隊員 M.アスラム・ライグルー 20才 (カシミール州政府登山局インストラクター) 連絡将校 P.スッパ 25才(インド陸軍,山岳兵 学校教官),シェルパ 4名。

以上であるが、このうち西郡は、日程の延びと 休暇の都合上、登山には参加できずに帰国。実質 的隊長には山森があたった。なお当初、登攀隊長 として参加の予定であった、空昌昭は健康がすぐ れず参加を取り止めたものである。

#### <隊荷の通関・輸送>

4月下旬、先発隊(2名)、5月初旬、本隊(5名)の出発予定は、インドの入国査証が取れぬまま西郡を除く6名が出発できず別途ビザ申請して取得した西郡のみ取り敢えず出発することとし、5月11日インド航空にて離日した。先発隊の任務は、先に海路輸送した隊荷のボンベイにおける通関、他の隊員のビザ発行についての交渉、登山活動に必要なカシミール州政府登山局との準備交渉などであった。

以下, 西郡の先発から 7月17日本隊合流までの 長かったインドでの交渉の主なものを記すことに する。 5月12日 早速、IMF、在インド日本大使館を訪ね、今後の隊の行動について協力を要請するとともに隊員の入国査証の発行について実状を説明し協力を要請したが、具体的な協力は得られなかった。

5月14日 すでに到着しているはずの隊荷の 通関とスリナガールまでの輸送の目的でボンベイ へ飛ぶ。その後通関の手続きや運送業者のストラ イキなどがあって難儀。

5月26日 ボンベィ滞在13日目にしてようやく総重量 5 トンにのぼる隊荷を運び出すことができた。

5月27日 隊荷ボンベイ発。トラックにてスリナガールへ(この隊荷はHAAJガルワール遠征隊の資材と同一梱包にしてあったが、とりあえずスリナガールまで運ぶことにしたものである)、西郡はニュー・デリーの日本大使館向け回送の乗用車に便乗して出発。ボンベイ滞在中は、日本領事館の皆さん、日本人学校の先生がたに大変ご迷惑をおかけした。記して多謝。

5月29日 1500㎞を走破してニュー・デリー着。ビザを取得したとの連絡は未だなく、当地での本格的交渉に入らなければならない。まず、柴田会長、沖前専務理事の紹介で、ニュー・デリーで陶器会社を経営する  $K \cdot P \cdot$  カプール氏とその部下、 $T \cdot R \cdot$  アインギャル氏を通してインド中央政府内務省と交渉したが、ビザの件は全く振り出しに戻っていることが判った。

問題点は、ビザの発行は、登山隊-IMF-内務省と手続きが進むべきところ、我々の場合はカシミール側との合同遠征ということもあって、手続きは我々とカシミール州政府登山局との連絡だけで、特に参加隊員が最終的に決定してからは、カシミール州政府から、IMFにも内務省にもメンバーリストの写しも届いていないことによるものであった。いたしかたなく、改めて最終的な隊員のリストを提出して、早急に善処願いたい旨頼み込む。

この間, 無線機の使用許可書を取得した。

#### <カシミール側 との打合せ。 そして、偵察にカルギルへ>

6月5日 隊荷のスリナガール到着確認, ガルワール隊資材のニュー・デリーへの輸送, スリナガールでの事前交渉, シェルパの雇用などの目

的でスリナガールへ飛ぶ。当地から隊員として参加することになっているM・アスラム・ライグルー,連絡将校に決定しているP・スッパ大尉その他関係者と会い,必要な手続きについて打合わせを行う。シェルパ雇用の段取りも済んだが,現地へのアプローチについては知らないことが多いので,急拠,途中まで情報収集に出かけることにする。

6月8日 スリナガール発,山岳道路を借り切りのジープで約200km走ってカルギルへ。ここで目指すヌン・クン山塊へのアプローチについて情報を集める。

我々の目指すヌン・クンへのアプローチはこと, カルギルからスル河沿いに南下し, ヌン・クンか ら流れ出るパルカチック氷河(仮称)を登山路に選 んで登るというものであったが、カルギルやこの 周辺の識者の意見によれば、パルカチック氷河か らヌン・クンへのルートは途中に大きな氷瀑がか かっていて危険だという。且ってインドの登山隊 をはじめ、他の外国隊によって幾度か試みられて いるがいずれも断念しているとのことであった。 私達もこの氷瀑が並々ならぬものであり、相当な 困難は覚悟の上ではあったが、この暗い情報に考 え込まざるを得なかった。その他トラックの手配。 ポーター雇用などについては明るい事情が得られ た。シェルパの雇用については連絡将校が近日中 にダージリンへ飛び、確保に当ることにして6月11 日スリナガール経由にてニュー・デリーへ帰った。 隊荷は6月10日無事スリナガールに到着したので 保管を登山局に依頼した。

#### <難行するビザ発給問題>

6月11日 日本からビザ取得の連絡は未だない。連日、登山の窓口である IMFへ出向いては協力を願い出ているが、今日は事務局のM・ラム氏いわく「6月2日、ビザ発行かた速やかに在日インド大使館へ連絡されたい旨内務省へ督促した」。日本でも山森副隊長を中心としてインド大使館との交渉に忙しい毎日のようであるが、インドサイドでもこの猛暑の中、打つ手はもうなく、あとは運を天にまかすより仕方がない。予定より1ヵ月以上もの遅れで、今後の日程とそれにともなって生じる支障を想い、いっそのこと中止にしようかとも考えるが、勤務の都合などをなんとかやりく

りして待機している隊員の顔がつぎつぎに瞼にう かんでその考えを否定する。

ニュー・デリーではガンジー首相の選挙違反問題などで何となく騒然としているが、モンスーンの北上も報じられ、富山県上市峰窓会隊(隊長、田辺郁夫・HAAJ会員)が難峰カランカ(6931m)の初登頂を見事果して下山してくるのに出会ったりしていると日程の遅れに心中おだやかならざるを感じる。

滞在日数の延びて行く間、ジャナカプリにある HAAJ事務所の整備を、上市隊隊員や事務所の管 理を願っているK・チャンド氏の力を借りて済ま せる。

#### 6月30日

この間明るい見通しは未だもたらされなかった。 カシミール側への経過説明とシェルパのその後の 様子を把握する目的で再びスリナガールへ飛ぶ。

カシミール観光局の関係者の尽力で中央政庁へ の依頼状などご協力を得, ワラをもつかむ気持で デリーへ帰る。

シェルパはヌン・クン経験者を含めて 4名がスリナガールで待機中であった。

#### 7月4日

今日でIMFへの額出しは何度目になるだろうか。IMF経由で内務省へビザ発行の進行状況をたずねて貰ってすっかり驚いてしまった。最近ビザ発行に関する規則の改正があり、登山を目的としてインドへ入国する場合は、従来のようなツーリストビザではなく、登山のための特別なビザを取得しなければならないということであった。従って改めて申請し直さなければならないということであった。

これは大変なことになった。改めて申請し直すとなるとビザの取得まで今後さらに1~2ヵ月はかかるだろうし、東京のインド大使館では、いったん"ツーリスト"で申請しておいたものを"登山"に変更し直すことはできないと言明しているのである。

この言葉を聞いて, 目の前がまっ暗になる感じ であった。

思い直して、カシミール観光局の紹介状をもって外務省へ出向き、事情を話して協力かたをお願いした。

もう半ばやけっぱちであった。こんなに日程が

遅れたのではポスト・モンスーンまで延期するより方法がないのではないかとも思ってみたが、隊荷を西郡名儀で輸入してあるし、そのことは西郡のパスポートに記入されているので日本で待機している隊員が入国して記事の書き換えをしないことには西郡は帰国できないのであった。まさか在インド日本大使館にこの肩代りをお願いするわけには行かない。更に悪いことには、我々の隊のあとスウェーデン隊がヌン峰に登山することになり、すでに許可を得ていると聞けばこのまま何とか押して行くより仕方がないとの結論に行きついてしまうのであった。

その後、インド外務省・パブリシティ・デビジョンのお世話で、内務省から在日インド大使館あてビザ発行についての善処かたについてテレックスをうってもらうことになった。

#### <待望のビザ下りる。本隊到着>

#### 7月16日

東京の山森副隊長からの電話で今日やっとビザがおりたことを知る。思わず溜息が出た。インド滞在2ヵ月もとうに過ぎて、やっと本隊を迎えることができる。灼熱のデリー、ボンベイは登山とは無縁な環境のように思えたが、ただただ登山の準備のため、本隊受け入れのための日々であった。ともかく残る6名の全隊員が渡印できるのだから粘った甲斐があったというものだ。しかし、西郡の勤務上許された休暇はとうてい登山に充てる分は残っていないのが残念であった。

隊員は結局、"ツーリスト・ビザ"から"エントリー・ビザ"へ再申請してビザを取得したのだ。 西郡がこれ以上休暇を延ばすことができないことについては、その強化のために富山上市隊の小 馬隊員に参加してもらう案も出たが、諸般の事情 で取り止めることになった。上市峰窓会の方々に は大変ご迷惑をおかけした。記して感謝申し上げ たい。

#### 7月17日

夜おそく、6名の隊員の元気な姿をデリー空港 に迎えた時にはさすがにホッとしたが、これまで さんざん苦労したのだから、頂上も登って帰りた いものだと、休暇の期限が7月いっぱいでそれも 不如意な自分の事情から隊員達に申し訳ない気持 がこみ上げる。気を取り直して通関を済ませ、ホ テルで7名が揃ったことをとにかく喜ぶ。

#### 7月18日

明日5名がスリナガールへ発つことになっているので、飛行機の予約、通関の残務、HAAJ事務所にデポしてある資材の再点検、お世話になった方々への挨拶まわりと仕事を分担して進める。

#### <全員スリナガール集結。隊長の帰国>

#### 7月19日

いよいよスリナガールへ。観光局の関係者への あいさつや記者会見などで忙しい。早速現地購入 資材の検討を進めるが、日本で考えていたものと、 シェルパも含めたインド側メンバーの考えとでは 細部に亘るとなかなか意見が一致せず苦労する。

デリーに残った清水(正雄), 鈴木の 2名 6 20日 には到着して登山の準備はいよいよ本格的になっ てきた。

西郡は、スリナガールから先の日程について、 山森副隊長に隊長代行を頼み、これには隊員も、 カシミール観光局の担当者も同情しつつ了解して くれた。

#### 7月23日

隊荷はトラックで早朝に出発したが、隊員をのせたジープがスリナガールを出発したのはもう昼近くであった。

全員を見送ってから、1人取り残されたような 淋しさをふり切るようにその日のうちにデリー着。 7月24日

デリー発,香港経由で25日東京へ帰った。何と も残念な2ヵ月半のインド滞在であった。

(隊長 西郡光昭)



ベース・キャンプにて

前列 左からM・アスラム, 保坂, 一人おいて山森 後列 左から一人おいて田中, 一人おいて山田, 清水, 一人おいて P・スッパ

#### インドヒマラヤ登山の申請方法

1975年にインドヒマラヤに登山した外国隊は、 HAAJの隊だけでなく、どの隊も大なり小なり登 山許可、ビザなどでトラブルがあった。これを若 干でもスムーズにするためにとIMFは概略次の ような申請方法を決めた。

- ①登山しようとする山名と高度(第2希望,第3 希望なども記入しておくこと)
- ②ルート図(アプローチも含む)
- ③登山期間(インドへの入国,出国月日を明記) ④主催団体 ⑤ビザ申請月日(観光ビザでは駄目
- で登山のための滞在ビザを取得すること)
- ⑥隊長,隊員の氏名,登山歴,パスポートの詳細⑦無線機使用の有無 ⑧登山装備表(消耗品と持帰り品に分けること) ⑨輸入許可申請書を用意⑩リエゾンオフィサーのデリー以遠の交通費,滞在費約1,000Rsを見込むこと。保険もかけること(約350Rs) ⑪登山申請書は6カ月以前にIMFへ送ること ⑫登山申請料として1,000RsをIMFへ支払うこと

などである。正式文書は「ヒマラヤ」第47号に 載せてあるので参照されたい。とにかく、少なく とも 6 カ月前に登山申請、ビザの申請をすること が必須ということである。 (O)



# 山森副隊長のヌン・クン通信から

#### 概要報告(2)……本隊行動記録

#### <BC建設,北稜にルートを取る>

#### 7月25日

パンニカル着。23日のスリナガール出発以来, 予定通りに行程が進まず難儀する。隊荷輸送の手 段がポーターになったり、ポニーになったり,果 てはトラックになったりでその度に議論がおきる。 しかし、センティク氷河入口の,1972年インド隊 のベースキャンプ(以下BC) 往復などをして, 今後のルートの検討をすることができた。

#### 7月30日

標高4100mにこの隊のBCを設営する。これから目指すヌンの登山がはじまることになる。BCから上の資材の輸送に10名の現地ポーターを雇うことにした。思えば長い道程であったが、BC建設を祝してささやかに乾杯。

#### 8月1日

保坂、アスラム、シェルパのミンマは9名のポーターを率いて第1キャンプ(以下 $C_1$ 、キャンプはCxと記す)を建設、高度は約4840m、 $D_{41}$ というピークの北西面に落ちるセンティク氷河の右峯で、前記インド隊の前進ベース・キャンプとほぼ同じ位置で、仲々快適である。

#### 8月4日

#### 8月5日

保坂、アスラム、ミンマで高度5280mに待望の $C_2$ を設営する。とこからヌンの北稜と西面が見えた。

これまでの隊員の体調は概ね次のとおりであった。

山森; 7月31日 C<sub>1</sub> 予定地まで登ったためか激 度の頭痛, 8月2日頃から唇が割れ, 夜 も眠れないほど。

田中; C2 ルート工作時に激しい頭痛。

保坂;過労も加わって顔のむくみ。

山田;食欲,睡眠ともに旺盛。



NUN KUN 全容 NUN 7135m (中央) KUN 7077m (左端)とパルカチック氷河

清水;偏食のせいか常時下痢。

鈴木;8月3日C<sub>1</sub>入りする時に吐き気と頭痛。 8月6日

C<sub>2</sub> より上部のルートについて次のとおり決定する。

- (1) 8月20日迄北稜ルートを攻める。
- (2) 8月21日以降は西稜へ転進。

8月9日

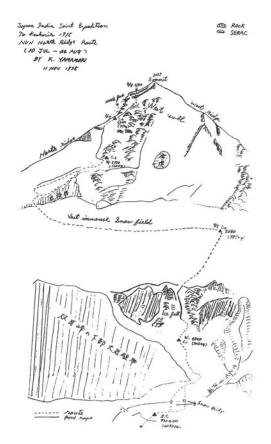
このところ天候悪く、3日間雨や雪に降られて 思うような行動ができない。

今日は山森がミンマを連れていよいよ北稜を目指す。岩尾根を越えるとヒドン・クレバスの危険のある雪原となり、案の定通過不可能なクレバスに行く手を阻まれたので西壁中部にあるセラック帯の左端までまわり、ここに $C_3$  を建設する。高度 5780m。

#### < C3 設置,悪天と雪崩,遂に北稜に出る>

#### 8月13日

 $C_3$  から上部は急な雪壁となっているので、かなりのロープを固定する必要がある。北稜を狙う我々の行動もいよいよ核心に入って来た感じがする。山森、保坂、ミンマが $C_3$  に入って更にルートをのばし、田中、アスラムを $C_3$  入りさせようと考えていた矢先、各キャンプとも雨と雪に見舞われ行動中止。セラック帯からの雪崩が心配だと



思ったとたん、 $C_3$  と $C_4$  へのルートが雪崩に襲われた。幸いテントに被害はなく逃げた $C_3$  の 3 名 - 山森、保坂、ミンマが多少流された程度で済んだ。

#### 8月16日

山森は今日から $C_2$  に定着して指揮をとることにする。保坂、清水は $C_3$  へ。 $C_2$  へ上った山田、アスラムは $C_4$  へのルート工作。田中は頭痛ひどく $C_3$  にて休養。この日は北稜へ出て貰いたかったが、案に相違して稜線までは達しなかった。

#### 8月17日

保坂、アスラムのルート工作隊は遂に北稜に出てくれた。そして大雪庇の上部、標高約6300m地点に $C_4$ を設営。

夜, 今後のアタック体制を発表。

アタック・メンバーには田中をリーダーに保坂 アスラムの3名。これら3名のサポートに山田と シェルパのカルマをあてることにした。

#### <アタック。 6700mで無念の退却>

#### 8月18日

保坂、アスラムは $C_4$ 入り後頂上へのルート工作をすすめる。山田、カルマは $C_4$ へ荷上げした後 $C_3$ へ下る。田中は体調悪かったが頑張って遅れて $C_4$ 入り。

#### 8月19日

いよいよアタックだ。アタック隊はストーブのトラブルのため出発が遅れて5時となったが、フィックス工作をしながら頂上岩壁へと進んで行く。田中はやはり身体が思うように動かないらしい。固定ロープの最終点から引き返した。

14時40分,保坂,アスラムの2名は遂に頂稜へ出た。後は緩い雪稜をたどるだけだが、しかし、2名の努力もこれまでであった。ほとんど1人でラッセルをしつづけた保坂は疲労も極度に達していた。

15時30分,帰幕の命令を下す。最高到達点は高度計によれば約6700m。これですべては終りだが、目指した北稜は実質的にトレースされたのだ。せめてもの慰めといえようか。

#### 8月20日

8月21日

今日は雪でヌンは見えない。昨日アタック・メンバーを帰幕させておいて良かったとホッとする。しかし、これまでの経過と今後のことについて様様な想いが胸を去来する。14時過ぎ保坂が $C_2$ へ帰って来た。泣いてわびる彼の姿に胸に迫るものを感じる。これで全員が $C_2$ に揃ったことになる。

各キャンプを次々にたたんでBCへ帰る。登頂が果せなかったのは山森のとった指揮に至らない点のあったことが原因だと反省するが、ともかく全員無事に、再びBCに集まることができたことで安心できた。

#### <撤収。帰国>

#### 8月24日

トラックでカルギルに隊員,隊荷とも到着。 明かるい陽差しの中で装備の再梱包等,最後の 残務整理に精を出す。

カルギルは旅愁を誘う街である。岩山に囲まれた盆地のような感じだが、日本ではみられない風景と雰囲気である。中央アジアのにおいとはこのような感じなのだろうか………。

#### 8月27日

田中, 保坂はシェルパを連れて, ラダックのレー, ザスカール, キュシュトワールのトレッキングに出発した。

残った隊員は隊荷ともどもスリナガールへの帰 路につき夕刻スリナガールに到着。

9月2日

隊員、ニュー・デリー着。

9月10日

別送した隊荷がニュー・デリー着。

以後,隊荷輸送やお世話いただいた関係機関に あいさつを済ませ,各自の予定で各地をまわり, 最終メンバーは10月10日帰国した。

各隊員の行動概要は次の通り。

山森;ネパールへ,カトマンズ経由アンナプル ナ周辺のトレッキングの後,再びインド に戻り帰国。

田中;保坂;レーから帰ったあと,インド国内, アグラ,ベナレス,ダージリンをまわり ネパールのカトマンズ経由にて帰国。

山田; デリーから香港経由帰国。

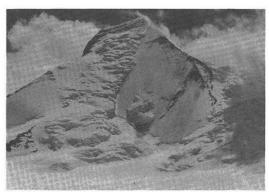
鈴木;デリーからマナリ周辺をまわり再びデリーに帰り,後帰国。

清水;デリーから帰国。

\* \*

以上が本遠征隊の行動のあらましです。多くの 方々に、さまざまな面でご心配、ご迷惑をおかけ しましたことを改めて謝し、とり敢えずのご報告 といたします。

なお、この遠征の詳細な報告書を作製すべく現在、編集に鋭意つとめておりますのでご利用いただきたく、あらかじめお願い申し上げる次第です。 (副隊長山森欣一)



ルートは左の稜線の下に沿って登り, 頂稜 岩壁帯を突破している

#### HAAJ 1976 ヒマラヤ·ツアー

お問合せお申し込みは下記へ — 打合せは毎月第 1,第 4 金曜日の東京定例集会(於:  $\mathrm{HAAJ}$ 東京事務所) などヒマラヤ集会で。

主催 (株) トラベル日本 (一般登録67号) 〒100東京都千代田区有楽町2-2-1ラクチョウビル5F 企画・後援 HAAJ・フロンティア〒164東京都中野区中央3丁目48-15沢本ビル1F

出発日	地域・ツァー名	期間(日)	費用(チฅ)	〆切日	定員	略 名	
4月25日	ガルワルの旅	15	363	3月末	20	GARWAL	
"	ガルワル・トレッキング	28	449	3月末	20	KUMAON	
7月25日	小チベット・ラダック	28	386	5月末	20	TIBET	
"	ザスカール	28	356	5月末	20	ZASKAR	
8月8日	カシミールの旅	14	389	6月末	20	KASHMIR	
"	アフガニスタン	14	398	6月末	20	AFGAN	
"	ファミリーツアー,カシミールの旅	<b>* 14</b>	353	6月末	40	SRINAGAR	
12月 26日	ネパールの旅	14	275	9月末	20	DURGA	
"	ガイドつきネパールの旅	14	357	9月末	20	KUND	
"	ファミリーツアー、ネパールの旅	<b>* 14</b>	333	9月末	40	NEPAL	
"	ファミリーツアー,ガルワルの旅	<b>* 14</b>	333	9月末	40	RANI	
"	ネパール・トレッキング	28	275	9月末	20	MODI	
"	山里先生とネパール・トレッキング	<b>※ 28</b>	478	5月末	20	PICTURE	
"	アッサム・シッキム調査隊	<b>※ 28</b>	約 400	5月末	20	ASSAM	
"	ビルマとダージリン	14	363	9月末	20	PAGODA	

上記の日程や費用は51年1月1日を基準としており、航空料、現地の都合で予告なく変更することがあります。詳しい日程表などがありますのでご請求下さい。(※印はHAAJ会員のみ参加可)



#### 8月18日(アタック前日) (晴)

朝 8 時,個人装備を背負い,明日のアタックを胸に秘めて  $C_3$  を出発する。保坂,アスラム,田中の 3 名思い思いのスタイルである。田中はここ4,5 日喰ったものは吐いてしまって,高度障害がひどく出ているようだったので  $C_4$  へだけは行こうと少し気弱である。アスラムに, $C_4$  へ早く着いたら上部 200 m のルート工作をする予定である旨を伝えて,昨日オープンした  $C_4$  へ向う。

12時、 $C_4$  に着く。抜けるような空の青さと、アイスとロックのミックスされた上部のルートを眼で追う。この上方で、ルートは3つ考えられるが、アイスルート伝いに行けば3時間で岩壁パンドに出られそうである。5時間あれば最後の頂稜に抜けられそうで、そうすればピークは大丈夫と読み、その旨を $C_2$  に知らせる。私の声に、 $C_2$  からの応答も心なしかうわずって聞える。そして少しでも明日が楽になるように、重い足をひきずりながら登って行く。アスラムはいやな顔をしていたが、"頂上へ行くのは我々だけなんだから……"と説得し、100 m のフィックス用ロープ 2 本を工作して下りる。

このルートは、取付部が深雪で、上部 100 mは、ブルー・アイスまたはその上に薄い雪が乗ったいやなルートである。アイゼンの出歯の部分で立ちどうしなので、アキレス腱が痛い。しかし、そんなことは問題ではない。明日生きるための闘いが始まったのだ。自分を生かすのは自分しかいない。自分の開いたルートを登るのみである。 4時間のアルバイトの末、帰幕する。

#### <雪と霧,岩壁帯を突破。幻聴を聞く>

8月19日、アタック(曇り、霧のちくもり) 6300mの朝は寒い。昨夜は満天の星が明日のラッキーを約束するかのように光っていたが、4時 30分眼を覚して外に顔を出すと星はなく、冷たい 風がテントに吹き込んで来た。「チキショウ、ついちゃいねぇ」。

ストーブをプレヒートしていた田中が, 1時間 以上も修理にとり組んでいたが, 結局うまくいか ずあきらめた。コップ一杯の水だけでサラミと、ゆであずきの缶詰を食べる。食べるというより、むりやり押し込む感じであった。アスラムも、日本食には最後までなじめなかったらしく、カレー以外は、無理に押し込む感じである。

昨夜のうちに装備分担していたので、それぞれ のザックにしまい込む。アタックにしては重いな あと思いながらも、しかし、2つの岩壁帯を突破 する必要最小限の装備は背負わなければならない。

5時、未だ明けやらぬ外へ出て行く。昨日 200 mフィックスしておいたので、そこまではハイピッチで行けると思っていたが、ルートは予想外にラッセルを強いられることになってしまうし、上部は霧で見えず、霧と雪が我々の視界を奪ってしまっていた。しかし、我々に残された道は上へ登ることしかないのであった。胸までのラッセルをし、ザイルが延びず、不安がつのる中を進む。体調の悪い田中が、フィックスの終了点まで来たところで、下りたいと言って来たが、ロープがなくなるまで頑張れとはげます。しかし、彼の頑張りはそこまでであった。彼はそこから引き返して行った。

雪との格闘で体力は消耗し、この霧の中、もしかしたら登れないのではないかという不安感をむりやりかき消して進んだ。そんな事を言っていたんではメンは登れないと自分を叱咤激励する。

フィックス・ロープがなくなる頃,下部岩壁帯に着いた。この上はスタッカットで登らなければならない。登路を探すとクーロアールがあり、これをアイス・ハンマーとピッケルで突破し(40m)アスラムを上げる。上部岩壁帯へと続く雪の斜面は、今にも雪崩れそうな深雪をかぶっていたが、悪戦苦斗の末、ダマシダマシ登った。

上部岩壁帯はハング気味で手ごわかったが、凹状部や上部チムニー状のクーロアールにルートを取って登る。突然そこで幻聴を聞いた 一 「保坂よく来た、ここまで来たのだから岩を登れ」と呼びかけている。ひとりでに岩をつかんでいた。ハッとして体制をたてなおす。これは私のうちなる幻との対話であった。

#### <くやし涙・頂上直下無念の退却>

そうとうしているうちにクーロアールを突破し 雪原へ出た。との雪の斜面を登れば頂上があるは ずだ。後続のアスラムを上げる。彼は、スタッカ ットのメイン・ザイルに自分のユマールをつけて 登って来る。日本では考えられないスタイルだと ガッカリする。体の疲労がはげしく、これ以上ト ップをやれない状態になってしまった。アスラム にトップを交代してくれと言うが出来ないと断わ られる。エクスペディションでは1+1=4とな るチーム・ワークが必要だというのに、このアタ ックは1+1=1の力しか発揮できない。残念で ある。

C3の山森副隊長を、トランシーバーで呼び出して現状を報告する。ビバークも考えたが今の状態では、疲労と衰退がはげしく、頂上を踏むためには得策ではないと思われるし、今朝のストーブの故障で喰うや喰わずで過ごさなければならなくなる。それに私1人でこのルートをラッセルして頂上に導くことはとても無理のようだ。高度計は意外にも6700mを指していて、この上未だ400 mの高度が残っている。このようなファクターが我々をこの地点に釘づけにしてしまったのだった。

頂上を目前にしてのくやしさと自分のふがいなさに、つい涙が流れた。"すべては終りか"瞬時にして眼前が真暗になり、この1年間取り組んできたこの登山計画についての想いが浮んでは消える。そして隊員の働きの結果が出る残酷さ、その途端、夢が消える冷酷さをここでかみしめなければならなかった。

頭の中は、隊員、隊長、HAAJの Expedition 研究会、家族、ガルワール隊、職場の人たち…… 色々な顔が現われ、対話をして消えた。みんなに済まないと思う気持と、"やれるとこまでやったんだ"という納得の気持とが交錯した。

アスラムと 2人で泣くしかない時間を過す。

これぐらいで簡単に登れるヒマラヤの山なら、 情熱をかたむける価値がもともとないんだ、登れ ないのが当然なのかも知れないと思うと少しは心 が休まるが、くやし涙はやがて号泣となってしま う。山森副隊長の「保坂しっかりしろ!」「お前 がしっかりしなければアスラムは無事には帰れな いのだ!」というトランシーバーの声で、我に帰 った。

そして何度も頂稜をにらみつけながら下山にかかった。スタカットでアスラムを下ろし下ろししながら5時, C4に帰幕する。

帰路は雲の切れ間から、北稜やパルカチック氷河の2つの氷河が青々と光ってみえた。すばらしかった。

#### <おわりに>

北稜, それは我々が日本から夢見ていた素晴し いルートだった。

頂きは踏めなかったが、HAAJ×ンバーが力を あわせてそこに挑んだ物語が終ろうとしていた。

隊の広域的編成、インドとのジョイント、メンバーの変更、ビザの2ヵ月遅れ等々の障害ファクターを乗り越えて切り開いた道だったが、もう一歩のところだった。これらの努力が、後々、成功したときよりも尊い礎になれば幸いなことだ。我々隊員はヌン・クンで学んだことを大切にして行うではないか。

我々がここまで来られたうらには計り知れない 蔭の力のあったことを隊員すべてが知っている。 インドのアプローチでお世話になった人々も含め てすべての方々に隊員一同多謝。

(隊員 保坂昭憲)



NUN 北稜(中央,左上へ斜上する稜) 最高到達地点は頂稜を%ほど行った地点 (編注:写真から判断すると7000m近い)

#### 

「ネパールで出会った人たち」

期間 3月25日~31日 午前10時~午後9時 会場 東京・新宿ステーションビル2階西側廻廊

# ヒマラヤの本・資料

ヒマラヤ関係のものが出版されましたら紹介しますので、名古屋事務所へ1冊お送り下さい。

書 名 ・ 発 行 年 な ど	発行所など	頒価	送料
ミルサミールからファラクサールへ 1970年	名城大学ヒマラヤ調査隊	600円	100円
カシミール とラダック 1974年	"	900	100
第3回東北ヒマラヤ研究会報告書 ヒマラヤ研究Ⅷ	H A A	1,400	200
EXPEDITION I ヒマラヤ研究 XI	"	2,000	300
秘境小チベット・ラダック (地図つき)	"	2,400	300
第2回東北ヒマラヤ研究会報告書 ヒマラヤ研究Ⅳ	"	1,100	300
HAAJガンジロバ隊帰国報告書	"	300	0
海外登山研究会資料Ⅳ マカルー交信記録,他	J A (	1,000	200
東海山岳Ⅱ	"	800	100
東海山岳Ⅲ	"	2,500	300
チベットとラダック	H A A	1,000	200
カシミールの街と山 ネパールへの旅	"	各 600	100
ヒマラヤの桃源境,ブータン・シッキム・アッサム	"	2,200	300
ヒマラヤを歩き登るために、第4,5回東ヒマラヤ研報告	"	2,400	300

「ヒマラヤ通信」「ヒマラヤ」バックナンバーは下記のものしか残部がありません。

第1号(20円), 第2号(20円), 第9号(50円), 第17号(150円), 台本製本用紙(200円), 第20~第52号 (ただし、27,35,36,38,39,42は品切)。各送料共400円に割引。会員のみにしかお分けできません。 東京・名古屋事務所へ取りに来ていただけると送料分だけ安くなります。各地で開くヒマラヤ集会に もできるだけ持参します。注文は先着順に受付。通信での申込は代金を添えて下さい。

〒 468 名古屋市天白区 一つ山 1-44-7 HAAJ名古屋事務所 郵便振替 名古屋 21645番 銀行振込 東海銀行鳴子支店 133-239番 「日本ヒマラヤ山岳協会」《注:図書券は4月1日より中止》 郵便振替振込用紙はどこの郵便局にもあります。送金料も安くて便利です。ご利用下さい。

<HAAJ 東京事務所へのルート> 国電中央線中野駅南口下車。三菱銀行の左側,南口商店街を抜け,中 野総合病院と中野郵便局の間の斜めの広い通りを左へ入ります。途中「公会堂下」のバス停を通過し (ここまで中野駅、永福町、渋谷、新宿よりバスの便がある)400 m位進むと左角に自動車屋があり、そ こを右へまわって 200 m行った右側に「沢本ビル」があります。中野駅からゆっくり歩いて15分ほどで す。HAAJ事務所はその1階です。金曜、土曜日の13時~20時まで担当の鈴木康志がいます。

<HAAJ名古屋事務所へのルート> 地下鉄「新瑞橋(あらたまばし)」下車。島田方面の循環線90番 のバスで「一つ山住宅口」下車。たばと屋を左にまわり、小川病院を通りぬけ、つきあたりの道を右に まわった3軒目、「沖」方です。

HAAJ出版物は下記の書店で扱ってもらっています。山の本を多くそろえ、親切にサービスしていた だける書店です。HAAJの本だけでなく、本のことなら何でも相談し、利用して下さい。

京都……京都市下京区四条河原町東81 H A 兵庫……宝塚市中州1丁目15-2 逆瀬川ビル内 大野屋書店 A 東京……千代田区神田駿河台2-1 出 東京……江戸川区西小岩5-18-10 仙台……仙台市一番町2-3-32 特 名古屋…千種区千種駅前 約

札幌……中央区南3条西3丁目4番街 広島……広島市本通1-7(金座街)

岐阜……岐阜市神田町通り4

扱

福岡……福岡市中央区天神2丁目9-110 横浜……鶴見区鶴見町3601 (豊岡通り)

海南堂(四条河原町電停角)

茗溪堂(お茶の水駅前) 小林静生書店(古書もあり)

丸善仙台 ちくさ正文館

成美堂(札幌駅前通り)

アカデミィ書店

自由書房

福岡金文堂(新天町) 西田書店(古書もあり)

# 1975年HAAJガルワール・ヒマラヤ遠征隊

#### 遠征実施にいたるまで

#### <ガルワール隊成立のあらまし>

カシミール側とのジョイントとして渉外が1974年1月から進められたヌン・クン(NK)計画の見通は4月に入る頃から当初とはかなり違ってきて実現が困難性を帯びてきた。そのため、NKが不可能になった時の対策が検討された。一方、この頃、ガルワール・ヒマラヤの一部がオープンされるらしいとの動きがキャッチされた。この地域も未踏査の地を開拓しようとするHAAJの方針とも適合し、魅力あるものであった。NKが不可能の場合の第二案としてガルワール・ヒマラヤ(以下GH)を選択することが決定された。ガルワールの最も高い未踏峰であるHardeol(7151m)の申請書が6月末にIMFに出された。事前研究は以前から行われていたのでとまどうことはなかった。

ところが1974年7月初め、インド政府はインナーラインの大巾改定を行い、そのためにGHの相当部分がオープンされることになった。NKもこの結果許可取得が容易となり、NK一本にしばるか、両隊併せて派遣するかの岐路に立たされた。メンバー、準備能力、資金、HAAJの今後の方向等多角的検討の結果、1975年に思い切って両隊を派遣することが決定された。ここにGH計画は独立して歩き始めたわけである。

#### <再度拒否された申請>

ネパール・ヒマラヤのラムジュン隊はこの時期 チベットの難民を主とするカンパ族紛争問題で苦慮していた。この打開のために隊長の清水澄がネパールに飛んだのだった。途中インドに寄ってNK及びGH計画について関係先をプッシュし、ハルディオル峰について明るい見通しを伝えてきた。しかし、彼の帰国後、8月末IMFからハルディオル峰不許可の通知がきた。我々は急ぎ検討して、同じく未踏峰のハルディオルの近くにある6992m峰(P.6992)を第一希望として再申請を行った。

P.6992 についての IMFからの最初の返事は極

めて明るい期待を抱かせるものだった。

公募したメンバーの選考も成され、この秋、我々は希望をもって本格的準備活動に入った。一方、NKの許可は10月に出た。しかしながら11月末になってIMFは前言をひるがえすようにしてP・6992の不許可の通知を送ってきた。理由は一切不明である。第三の申請を急ぎ行う必要があったが、不許可の理由が一切不明であることがウィークポイントとなり迷いに迷った。隊員と関係者には焦りが出ていた。隊員候補に幾人か不都合が生じてきた。

ことに至っては直接現地に行って何らかの決断をするのが得策となり、NK隊もインド側との細部打合わせが必要であったので、思い切って副隊長の稲田を現地に派遣することにした。12月末から75年1月にかけて、滞印中の沖と共にIMFに出向いて対策を取った。各国隊の申請状況、IMFの意向等を勘案して、ドウナギリ、チャンガバンを夫々、第1、第2希望として申請した。これらの許可の可能性は充分で、どちらが許可されても致し方なし、万一不許可でも1975年にこだわらず、計画を継続させて行く方針であった。

準備の方はNKと合同で隊荷の船便輸送という ことで、大半の装備は2月中に調達すべく仕事を 進めた。

3月に入り、第1、第2どちらをとってもよろしいとの許可が届いた。我々はチャンガバンを選択した。未踏のウッタル・リシ氷河に近い方を取ったわけである。許可を得て隊の準備には馬力がかかり、具体的な実行計画が急速に進められた。

#### < NK隊の出発大巾遅延=装備計画を 根本から練り直し>

しかしながら、4月に出発予定のNK隊に出入 国手続上のトラブルが生じた。渉外としてインド に飛んだNK隊西郡隊長のけんめいの努力にかか わらず事態は進展しなかった。

計画では、プレモンスーン期のNK隊で使用した装備を、ポスト・モンスーン期のGH隊が引き

続いて使用することで準備を進めてきた。この計画を実施するには6月中旬の出発がタイムリミットであった。中旬を過ぎた時点でこの計画は放棄された。NK隊を優先させ、GH隊は計画の総修正を行い、物資を緊急に補充することになった。財政的に余裕のない我々にとっては、非常に手痛い打撃であり、資金対策に苦慮した。

7月中旬,NK隊は出発した。GH隊は7月下 旬漸く出発体制にこぎつけた。

ふりかえって見ると、隊の存否を決するような 数々の苦難を何とか乗り切った末の出発であった。 困難に突き当る度に「これがヒマラヤ遠征なんだ」 という言葉に歯を食いしばって絶望を振り切って きたわけである。

8月7日,稲田副隊長,能勢,今野,舘野の4隊員が出発,10日に今井,14日に清水隊長,17日に萩原の各隊員が羽田を発った。各人各様の深刻な問題を排除しての旅立ちであった。ここに至る間,HAAJの多くの方々の励ましがどれほど我々の心を支えてきたか,あらためて感謝申しあげたい。なお,「岩と雪」47号,「岳人」347号にもこの記録を発表しました。(副隊長 稲田定重)

# P. 6992, Ca 7000 (P. 6911), BAMCHU (6303m) 初登頂

G H隊行動の概要

#### <デリーでの準備, 渉外>

8月7日, 稲田副隊長, 能勢, 今野, 舘野の4 隊員が約 250 kgの隊荷と共に先発した。ヨーク・ ホテルをベースにして,連日出発準備, 渉外に忙 殺された。毎日35℃位のむし暑いデリー市内をシ ョートパンツ姿で汗をふきふきがんばった。ボン ベイに陸揚げされ、一旦スリナガールにデポされ ていた隊荷は、NK隊により発送され、無事HA AJデリー・オフィスに到着していた。デリーで の仕事は次の様なものであった。物資購入、梱包 (全隊荷の再梱包), 渉外(IMF関係, 輸送, 関係 機関挨拶,他)。 怪しげな英語をふりかざして懸 命に働いた。第2次隊荷は今井隊員、清水隊長と 共に夫々10日, 14日に約 350 kgが到着した。同じ 便で来印された HAAJカシミールツァーの方々に は大変なお世話になった。17日に最終便の萩原隊 員が到着し、予定通り18日早朝、チャーターバス に約2トンの物資と隊員を積み込んでオフィスを 後にした。

#### <4隊に分れてスタート>

途中スリナガールの街(カシミールと同名の街がガルワールにもある)に一泊し、19日に最奥の部落ラタの一つ手前のレニの小学校に無事隊荷がおろされた。当初計画ではクアリ・パス越えのトレッキングを予定していたが、モンスーンの明け

が遅く、山は連日雨模様なので中止したわけである。ポーターアレンジは、リェゾンオフィサーの協力もあって22日には本隊が出発できることになった。隊荷の整理と25kg毎の再梱包に追われた。幸い小学校の2教室を借用できたので能率的に進んだ。

ポーターは当初70人程度と踏んでいたが、ネパールと違って、自分達の食糧は25kgにプラスして担ぐことはしないので、ポーターの食糧を運ぶポーター、その又ポーターというわけで、最終的には92人になってしまった。会計は予想外の出費に頭をかかえた。

21日に今井、萩原両隊員がルート偵察と工作の任を帯びて先発。22日に稲田副隊長、今野、能勢、 舘野の各隊員が本隊として64名のポーターを伴なって出発した。24日に清水隊長とリエゾン・オフィサーのフンダルが後発として、更に27日にサーダーのJ・シンが食糧ポーターと共に後々発隊としてスタートした。都合4隊のパーティに分れてモンスーン未期の降雨の中にキャラバンを開始した。

#### < 雨中のキャラバン, 険路に逃げ帰る ポーター。B C 設置 >

モンスーンは未だ明けず、中盤まで毎日氷雨に たたかれた。特に初日は雨がひどく、破損するダ ンボールが続出、ポーターも急坂をスリップして 登れないとのことでラタに泊り、隊荷の大補修を 行った。

ラタ・カルクまでは一気に1400m近く登る。翌日は4252mのダランシ・パスまで上がり、北穂のキレットの連続のような岩場を渡ってカールに出る。ハヌマン・ガルへは1000m程急降、雨の中ツルツル滑る急斜面に泣かされた。ポーター中にも病人続出で、ドクターは大繁盛。ラマニに来て漸く天候が回復してきた。ところがここで30余名のポーターが帰ると言う。この先のゴルジュ帯の通過が恐しいわけだ。仕方なく残りのポーターでピストン輸送作戦に切替えた。

先発が苦労して張ったフィックスロープにずい 分と助けられたが、良くも通って行ったというよ うな険しいルートに驚かされた。

最難関を突破して、内院の一角ティルチャウナイに到達した時は、全員無事をナンダ・デヴィの 女神に感謝する思いであった。ダクニ・ナンダ・ デヴィ・ガルをフィックスで渡り、ウッタル・リ シに入る。

ウッタル・リシをチロリアンブリッジで荷物も 人も通し、漸くにしてBCを指呼の間に望むこと になった。ここを基地にして、下部と上部の往 復ボッカをやり、9月1日に全隊荷と隊員は待望 のBCに終結した。

B Cは標高4500m, リエゾンとポーターが「H AAJ KHUND」(クンドは湖の意味の現地語)と 名づけた澄んだ氷河湖のほとりで,チャンガバン 氷河のターミナル・モレーンに近く,前面をウッタル・リシ氷河のサイドモレーンが長城のように 区切っていた。付近にはエーデルワイスを始めとして,高山植物が多く,ナンダ・デヴィを真上に 仰ぐ別天地であった。



恐れをなして帰ろうとするポーター達を説得する リェゾン・オフィサー = ラマニにて =



リシ・ガンガ・ゴルジュに苦斗するキャラバン

#### <チャンガバン偵察。P. 6992への転進>

4日間程BC建設,隊荷整理,休養で過した後,9月5日から登攀行動が開始された。6日にはチャンガバン氷河源頭近くの5180mにアドバンス・ベース・キャンプ(ABC)が設置された。しかし,その後6日間降り続いた雪のため壁に近づくことができず,偵察も思うにまかせなかった。連続するナダレの音に、ABCの空気は非常に沈んでいた。想定したルートは、カランカ南西フェースを登り、中段からトラバースしてコルに出るものである。幾つものハンギング・アイスの間をぬう非常にきわどいものであるだけに、慎重な雪崩の観察を必要とした。一旦全員BCに下りて11日にミーテングが持たれた。

ルートの危険性,技術,装備,対外的諸問題等について,個々人の意見を徴して多面的に掘り下げた。結果は"残念だがチャンガバンをあきらめ他に転進せざるを得ない。転進先はウッタル・リシ源頭の山"ということでリエゾン・オフィサーに変更の許可を求めた。リエゾンは非常に残念がっていたが,我々の情況を良く理解してくれ,IMFへ転進願書を作成,それと共に転進方向を許



ベース・キャンプ付近,前方ハージ・クンドその向うにウッタル・リシ氷河のサイド・モレーン

可してくれた。

#### <アイスフォールを突破 バムチュー(6303m)に初登頂>

翌日から再び行動が開始された。チャンガバン 氷河に上った物資を下ろすのと平行して、ウッタ ル・リシ氷河源頭への ABC 建設が進められた。ポーターを総動員して急ピッチの荷上げが行われた。 ABC (5000 m)から上では、高差 650 m余のアイス フォールの突破がポイントになっていた。当初アイスフォールの中央突破が試みられたが、思うよ うにルートが伸びないと判断されたので左岸寄りをとった。左岸障壁からの雪崩は中央寄りにルートを取ることで回避できることが分った。アイス フォールは、下部セラック帯、中段の雪原帯(ヒドンクレバス多し)、上部セラック帯に分れていた。

上部セラック帯は、左岸ルートが岩壁に突き当るため正面を突破せざるを得なかった。相当に崩れた迷路のようなセラックを何とかまわり込み、思い切り中央支稜寄りにトラバースし、最上段の雪壁に約  $100\ m$ のフィックスを付け、抜け出た雪原の高みに $C_2$ を設置した。9月18日である。

雪原のずっと上部にはコルが望まれ、広大なスノープラトーが P.6547 まで続き、 我々の研究の結果発見された Ca7000 峰がその上にあった。コルの 6230m 地点に21日に  $C_3$  が設けられた。  $C_3$  は P.6992 と Ca7000 との両峰のファイナルキャンプとして絶好の位置である。  $C_3$  まではひたすらの雪の緩斜面の登りで、スノープラトーに出てからが長く、その広大さに驚かされた。コルから北

方には、ハルディオル、ティルスリ、カメット、 ガンゴトリ山群など、インナーラインの向う側の 山々が見事にのぞまれた。

一方,動めの関係で中途下山の事情にあった今 野隊員については、彼自身悔を後に残さない行動 をさせようということで、他の隊員の支援のもと に、バムチュー支隊として位置づけた。

12日から態勢、萩原両隊員と共にチャンガバン 氷河に入り、P.6053峰を目指したが、氷壁に阻ま れて5700m付近で断念した。一旦BCに下り検討 の後、大障壁の東縁にある未踏峰Bamchu (バム チュー 6303m)を目標とすることになった。リエ ゾンのフンダルも大乗気で、9月16日からアタッ クを開始した。同日5050m付近に前進キャンプ を設け、18日は6000m地点まで工作し、翌日2人 は500mの鋭いナイフリッジを突破して初登頂に 成功した。(詳細は別項)

#### < P. 6992 に全員登頂>

P.6992 は主稜を忠実にたどる計画であったが、長く、雪庇が大きく出ていて危険なので、ショルダーピーク直下まで雪壁を直登し、トラバースして頂上下のコルに出るルートを採ることにした。600 mのフィックスロープが工作隊によってセットされた。

9月27日,第1次登頂隊の萩原,今井両隊員は午前3時にC3を出発,強風に悩まされながらも11時30分,遂に頂上に立った。帰路は濃いガスにまかれ難渋したが、フィックスが偉力を発揮,無事C3に帰着した。第2次登頂が翌28日,清水隊長以下,残る4名によって成功した。(詳細は別記)

#### < Ca 7000 (P.6911) 初登頂>

隊員は一旦C<sub>2</sub>及びABCに退いて休養を図っ



チャンガバン 6864m (左)とカランカ 6931m (右) 左はシプトンのコル

た後、Ca7000へのアタックが開始された。もともと荷上げは、両峰の全員登頂を目標として行われていたので物資は充分、休養さえ取れれば直ちに第3目標に向かう態勢にあった。10月2日、今井、萩原両隊員は $C_2$ を出発(午前3時)、能勢、舘野両隊員のサポートを受けて東南稜に挑んだ。変化の多い雪氷に悩まされながらも、彼等は順調にピッチを延ばし、12時50分頂上に到達した。(登頂記は別項)サポート隊は彼等を助けながら、P.6547の登頂を目指したが,時間切れで引返した。

BC撤収の日程がサーダーとリエゾンの要請で大巾に早まったため、アタックは一次のみで打切り、直ちに撤収に入った。既にP.6992登頂後、ABCの物資は連日ハイポーターによってBCへ下ろされていた。

10月6日,全隊員と上部キャンプの物資がBCに終結を完了した。

#### <落葉を踏む帰路のキャラバン>

B Cで休息の後、隊荷整理とパッキングに入った。この間、下の村までポーター集めにサーダーを下山させた。帰路ポーターは29人以内に抑えることにしていた。

ポーターが上がってくるまでの間,1日行程下までポーターと隊員によって荷下しを行った。その合間に隊員は1人或いは2人パーティで,思い思いの方面へ日帰りのトレッキングに出かけた。

10月9日, サーダー他のポーター先行隊が早く もBCに到着, 隊員をあわてさせた。午後, 一同 ナンダ・デヴィに向かってロキシーで乾杯, 登山 活動の無事終了を感謝し, 帰路の安全を祈って住



みなれたBCに別れをつげた。この頃になるとBCにも毎朝霜が下り、雪が舞う時もあった。リシ・ガンガ・ゴルジュに新雪が付いたら帰路のキャラバンは地獄の様相となる。

ティルチャウナイとラマニの間は霜が下りて滑り易かったが、往路とは比較にならない程、踏跡が付けられていた。ラマニからは紅(黄) 葉した木の間の道で、時間的にも故国の秋山を想いながらノンビリと下った。来る時、氷雨にたたかれて苦斗した行程も、抜けるような青空の下、極めて快適だった。ラタの部落は取り入れの最中で、村の女達がせわしなく働いていた。

10月14日、レニに到着。ポーターの賃金を支払い、隊荷の整理をした。ポーター達に招かれて、 一夜歓迎攻めにあったり、サーダーのもてなしを 受けたり、キャラバンのフィナーレは楽しいもの であった。

15日夕刻,約 300 kgの隊荷(他に 400 kgをレニのサーダー宅にデポ)を持ってバスでジョシマートへ。久しぶりの街のざわめきが懐しいものだった。

翌日はバドリナート巡礼の予定だったが、バスのトラブルでダメになった。バス会社と 2 時間ほどやり合ったが、しょせん"インドの議論"にはかなうすべもなかった。

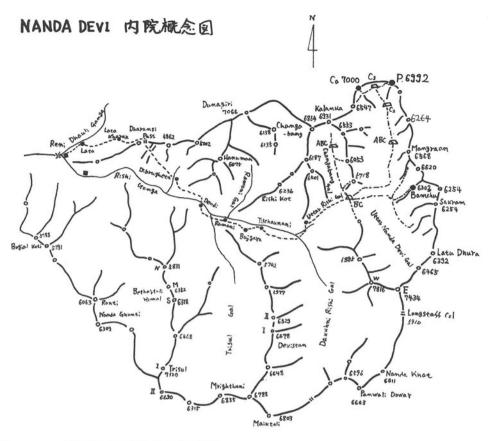
17日,早朝のバスでジョシマートを出て13時間 もゆられ,リシケシの先,ライラワから満員夜行 列車でデリーに18日早朝着。

#### <登山料の追加 3000 Rsを支払う>

IMFへはリエゾンと共に報告に行ったが、我々は当初 Booking したチャンガバンより転進し、P.6992、Ca 7000、Bamchu (6303) の 3 峰を登ったので追加 3000 Rs を請求された。支払わなければ記録には残らないとのことなのでやむなく支払った。

なお、リェゾンオフィサーが地図局で確認した 所では、Ca7000 には 6911mの標高が与えられて いるという。

10月21日夜、隊としての現地解散パーティを盛大に行った。翌日、隊員はそれぞれの予定を持って、アフター・エクスペディションを楽しむために旅立って行った。そして、稲田、舘野両隊員をしんがりとして、11月7日までに全員無事、故国の土を踏むことができた。(副隊長 稲田定重)



隊員

隊 員 今井二郎 (28才) 梱包,輸送(食糧)

隊員名

隊 長 清水 澄 (39才) 総括

隊 員 萩原明郎 (27才) 渉外, 戦略

副隊長 稲田定重 (34才) 庶務, 戦略

隊 員 舘野秀夫 (26才) 装備

隊員(医師) 能勢真人 (29才) 医務,調査

リエゾン・オフィサー B.P.S. FUNDAL (24才) インド陸軍パラシュート部隊中尉 HMI OB

コック 1名

隊 員 今野一也 (36才) 食糧

ハイ・アルティチュード・ポータ 2名

#### P. 6992峰登頂記

# RISHI PAHAR ("賢者の峰"の意) と命名, リ シ パハール IMFへ申請,連絡中。

朝と呼ぶには早すぎる午前2時, P.6992峰に向って出発。零下25度, 睡眠不足のためか, 何のためか判らぬが何ともすっきりしない頭, こんな事で今から頂上に向おうとする自分が不安になる。

テントを一歩出ると強烈な寒気がボケーとした 頭につきささるようだ。先を行く隊長の後を追い フィックスロープの起点まで行く。今更何もかわ す言葉はない。無言でユマールをセットし登りは じめる。振り返ると闇の中に二つのライトが近づ いてくる。

50 mずつに区切られたフィックスロープを一本 一本たんねんにかけかえながらの単調な雪壁の登 り、頭の中は空っぽ。ひたすら登ることに専念す る。闇の中に聞こえるものと云えば、ロープをス ライドして行くユマールのかすかな音と、雪面を なめるように吹きぬけていく風ばかり。時折まい 上る雪煙が顔面に強烈なパンチを見舞って通りす ぎる。まったく静かな世界だ。

休むことなく雪壁にダイレクトに張られたフィックスロープ (600m) を登りきった時は自分ではかけ登ったつもりでいたのに夜は白々と明け始めようとしていた。

フィックスロープの終点はショルダー・ピークの2~3ピッチ下と思われる。一昨日、私と隊長と2人で1日かかってルート工作をしたものの、ロープがたりずに肩まで届かなかったのだ。

ここから隊長と私(舘野),稲田,能勢と2人ずつアンザイレンし,我々のパーティが先行し,大雪壁のトラバースを開始する。スタカットで右へ右へとトラバース,何ピッチなどと数える気はもうとうない。右上のP・6992峰の頂上と思われる尖峰が近づいているのか遠ざかっているのか判らない。

背後には、次第に明け始める空に、Ca7000峰カランカ、チャンガバン、ドゥナギリなどの峰々が浮び出てくる。7000mの夜明けは実に壮大である。下から見上げてばかりいたCa7000峰の平べったいドームもこの高さまできてみると何とそのとんがっている事におどろく。

最上部のクレバスを越え、60度近い雪壁を2ピ

ッチで登りきると C2 からも認められた稜線の露岩に出た。その蔭で風をさけて小休止。頂上はすぐ間近に見える。残すところ高差 150 m ぐらいだろうか。この先,稜線の広いコルにやや下りぎみに進み、コルより正面の雪壁に取り付いて右からの稜線に出、雪稜を左に登ったもっとも高い所が頂上なのだろうか。前日の2人のトレールが正面の雪壁に残されている。2人は今我々のいるあたりからは頂上は見えないと云っていた。

露岩の蔭からはい出し、コンテでコルに出る。 吹きぬける風はさすがに強い。もたもたしている とチベットまでふっとばされそうだ。信じられな い程近くに見えたハルディオルに1人興奮してし まう。

コル正面の短かい雪壁で隊長が8%撮映機を出すと云うのでトップを稲田組に交代する。能勢ドクターが一緒に行こうと泣かせる事を云う。いいから、いいから先に行ってくれ。

稜線の小さな雪庇を乗っ越して雪稜の蔭に消えていく二人をカメラに収め、後を追う。頂稜に出、1ピッチ行った所で2人が待っていた。頂上はあと1ピッチ先にあった。前日のステップが細い雪稜の果てまで続いていた。先に行けと云うのでためらう事なく、日の丸とインドの国旗をピッケルに結び付け最後のピークに向かう。右側はバッサリと3000mの空間があり、より慎重にといい聞かせて一歩一歩前進する。急に強くなった風、視界が広がる。中1mもないか細い雪稜の果てが頂上



P.6992 (中央) 点線は登攀ルート

だった。

しっかりとピッケルを打ちこみ次々と登ってくる3人をせまい頂上に迎える。

時間は丁度10時、8時間かけたステップが右下にのびる雪稜に細々とついている。そのはるか下の $C_3$ にいる今井、萩原の2人にトランシーバーで登頂を簡単に伝える。

ウッタル・リシ氷河の源頭にそびえるこの峰に

憧れ、同じように今まで苦労を共にしてきて、こうして全員が頂上での歓びを分かち合う事ができたなんて……。

多くの人々の額が連なる山々に重なって見えて くるようだ。

ナンパ, アピなど西ネパールの山々, ナンダコット, ナンダデヴィ, トリスル, カランカ, チャンガバン, Ca7000 ·······。(隊員 舘野秀夫)



## Ca 7000(P. 6911) 初登頂

SAF MINAL ("白いピラミッド"の意)と命名, サーフ ミナール IMFへ申請,連絡中。

過日の P・6992の全員登頂終了後全員で休養をとり、次の目標 Ca 7000 mに備える。この山は地図上にも記載されていず、正確な標高も分らない無名峰であり、色々な地図、写真等々から私達が発見した私達の山であるので是非共登頂したいピークである。

9月29日隊長、副隊長はBC及びABCへとそれぞれ下山、我々、今井二郎、萩原明郎の2人は $C_2$ にて $C_3$ より下山してきたドクターと7名で休養。高度障害のためか、あるいは疲れからか、何もする気にもならず無気力そのものであり、ゴロして終日過ごす。夜はヒマラヤに居ることも忘れ日本の低い山、あるいは峠のこと、日本の四季折々の山の話と常日頃あまり耳にしたことのないような話に時の経つのも忘れて話しているが、私のようにただガムシャラに登ることのみに楽しみが集中している人間にはどこか異国の話をしているようで大変興味深く感じられた。以下、日記より、初登頂の記録を記してみる。

9月30日、 $C_2 \rightarrow C_3 \rightarrow C_47000$  のルート工作。 萩原明郎,通称萩ヤンと 2人で放射熱で暑い氷河の中をひたすら $C_3$  へ向かう。デブリ跡や広くなったクレバス,膝迄のラッセルにと驚かされたり,悩まされたりしながら約 1 時間30分で $C_3$ 入り。定時交信の後しばらく休んでから $C_47000$  のルート工作へ。 膝位のラッセルを約 2 時間で取付点着。適当にクラストした雪壁に 150 mのフィックスを張り, $C_3$  へ戻る。平均斜度 45~50度位の雪壁であり,技術的なものより体力,精神力が強く要求されるものと思われる。夜7時の交信にて $C_2$  にいる 2人の体調が思わしくなく, $C_2$ 

での体養は結果的に失敗だったのだろうか?

 $ABC \cdot C_2 \cdot C_3$  の同時交信にて  $C_a$ 7000 アタックについて議論が交された。

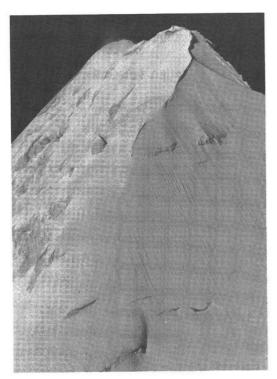
 $C_3$  の我々 2名は全員が ABCへ一旦下山し, 体調を整えてでも全員登頂という線で押したが, 日程の余裕がないため,  $C_3$  にいる 2名でのワン チャンスアタックと決定。

明日の行動予定

- 1. C<sub>3</sub> にいる 2名は明日 C<sub>3</sub> にて休養
- 2.  $C_2$  にいる 2 名は  $C_3$  入り,余裕があれば,  $C_a$ 7000 へのフィックス延長
- 3. ABC にいる 2名は明日休養, 10月 2日に アイスフォールルート確保の後,  $C_2$  もしくは  $C_3$  入り, ということに決定した。 10月 1日

 $C_3$  の 2 名及び A B C の 2 名は本日休養する。  $C_2$  より能勢ドクター,舘野の 2 名が  $C_3$  入りするので昼近くサポートに下る。  $C_2$  には煙草がないのでさぞやドクターはいらいらしていることだろうから一刻も早く煙草を渡そうと  $C_2$  めざしたが,昨夜の雪も意外と深く,またまたラッセルである。ドクターは煙草を吸いたいためか舘野をグングン離して登ってくる。逆ならばやはり私も同じようになるだろう。

日中は紺碧の空に真白い山のコントラストが美しかったのに、この頃では雲のわく時間が徐々に早くなり、いよいよ冬近しを思わせる。昼の交信にて10月12日にBC撤収、後下山となり我々の登山期間も残り少なくなった。また明日ドクター、舘野の2名はアタック隊のサポート及び余力があればP・6547へアタックと決定した。



Ca7000 ( P.6911 ) 上部 登頂ルートは左側の稜(中央稜) 左最奥が頂上 = P.6992の途中から=

C3 到着後、しばらく休養したドクター、舘野は明日のP・6547の偵察を兼ねて、Ca7000へのフィックス延長に疲れた体に鞭打って出発していった。明日はこの献身的な仲間の好意にむくいるために、また今迄の皆の努力の終結としても是非共無事念願の初登頂をはたしたいものと肝に命ずる。夜の交信の時、世界岳人注目の的エベレスト南西壁に挑んでいた英国隊(C・ボニントン隊長)がついた登頂に成功したことを知る。我々が第1目標としていたチャンガバンに昨年登頂した英国隊メンバーが、会回は未踏の南西壁に成功したことを知り、一層闘志がわく。

#### 10月2日

午前3時ドクター、舘野の見送りを受けて満天の星の輝く雪原に出ると冬近しを思わせるような肌寒さを感じ、身のひきしまる思いである。約30分のアルバイトで基部着。フィックスに導かれて約250m直上する。ユマールにての登攀は非常にスピーディである。これよりスタカットにて直上。午前6時の交信をする頃より朝日があたりはじめ、

さしもの肌をさすような寒さも次第にやわらぐ。 それにつれクラストして登りよかった雪壁も雪の 状態を悪くして行く。いくら登っても青空に雪壁 が吸い込まれていくような錯覚を起し、自分自身 の現在地点が把握できず、トランシーバーによる 確認以外ない。

朝食に餅を3きれ食べただけなので腹は減るし思っている程高度もはかどらないので、ふてくされて昼食とする。下からは「あと少しだ」とトランシーバーで送ってくるが、腹が減っては何とやらで仕方がない。

腹もふくらんだのでピッチを延ばそうと約30m 位登るとそこが絶頂であった。時に12時50分であった。チベット高原が,その奥には聖山カイラスがあの長谷川伝次郎「ヒマラヤの旅」の写真そのままに見えるのに思わず感激。眼を転ずると西部ネパールの山波が……。先日のP.6992 登頂 時とはうらはらな無風快晴の天候である。 $C_3$  にいる仲間や,今 $C_3$  へ着いたばかりの隊長達が自分のとのように喜んでくれている。本当に良い仲間に恵まれたものと感謝せずにはおれない。こんな素晴らしい仲間ともっとこの雄大なヒマラヤの山行を楽しみたいが,いよいよ登山期間も終了間近である。頂上直下に露岩があったので生への土産とする。午後3時眺望の素晴らしい頂上を後にし,皆の待つ $C_3$  目指して下山の途につく。

(隊員 今井二郎)



(表紙画,カット 今野隊員)

# 6,992m 峰全員征服に男泣き! ありがとうございました!

遂に皆様に吉報をお知らせ出来ることになりました。冬の足音も近い、このナンダデビーの山懐で喜びをかみしめています。遙かな長い苦労は自分の好んで選んだ道なのですが、私もこうして誇らしいニュースを書き得る隊長になれ、隊員は勿論のこと、蔭になり日向になり応援協力をして下さいましたHAAJの皆さん、そして精神的物質的に力になって下さった沢山の皆さんに心より感謝し、お礼を申し上げます。そしてこの現地でも数えきれない程多くの人々のお世話になりました。

本当に皆様ありがとうございました。遠いインドの人跡未踏の地より重ねてお礼申し上げます。

「アタック隊は11時30分,ピーク6992の頂上に立ちました。」強風と寒気にとぎれとぎれながらも元気な今井隊員の声です。「この幸運を与えてくれた多くの人に感謝します。出来れば全員が同時にこの峰に立ちたかったのですが。」萩原隊員の声は感激にややむせんでいます。キャンプ間,移動のため,生でこの声を聞けなかった隊員が次々に $C_3$ に到着する度に録音機が繰返し繰返しまわされます。遂に舘野隊員が感涙に目を真赤にして泣き出すと,稲田副隊長がもらい泣きをしました。人一倍感激性で涙もろい私も押えに押えていたものが堰をきってしまいました。任務のため $C_2$ を最後に出た能勢ドクターは第2次交信のときようやく $C_3$ のテントに転げこみましたが,涙で声になりません。ガルワールの最奥の山まで来て,信じられない感激の男泣きは本当にあったのです。

思えば長い年月でした。稲田副隊長の熱意と男の友情にほだされて,この探検臭の強いガルワールの未踏の地を選んで以来,仲間集めや申請の  $2 \sim 3$  転,誰もこのウッタルリシ,バギニ,ミラムの三大氷河の源頭に位する P-6992に来れるとは予想出来ない情勢でした。それが転進を許すリェゾン・オフィサーのフンダル氏の好意で氷河に偵察を出して以来15日間,さしもの憧れの山も我々の前に兜をぬいたのです。

こんな交々の感情を他にアタック隊は苦心をしているらしい。午後1時30分の連絡を最後に通信が途絶えている。山は氷雲がかかり風も寒気を増している。4年前のガンガプルナの経験が頭をかすめる。急峻なリッジで濃いガスにとり巻かれたら、どこまでが大地で、どこから空になるのか判らない。そのことは先程の交信でよく注意したのではあるが……。不吉な予感が走る。どうか落ちないでいてくれ。神に願う私である。バギニ側に転落したら一巻の終りだ。それにしても3時間も連絡して来ないなんて、どんな環境におかれているにしても許せない。帰るなり一喝してやろう。空は晴れない、ガスを通して山稜ばかりを見ている。

午後 4 時30分,今井隊員より「萩原サーブは  $C_3$  へ帰着したか」と無線が入る。何てことだ,ザイルを解いたのか。フィックス・ザイルが見つからず手わけして探すために 30 分程前に別れたという。いまいましさと心配で私は半狂乱だ。ドクターは矢も盾もたまらず吹雪の中へとび出す。他の 2 人もアタック隊の帰着にそなえて作ったハチミツ・ドリンクを投げ出してしまった。

今井隊員から「目の前に岩稜がみえる。」と入る。バカーッ動くな、それはバギニの岩壁だぞー。私は一瞬目の前が真暗になった。あれ程、生きて連れて帰ると約束した今井君の両親の顔が、脳裏にちらつく。 ああ、神様 「二郎動くな、今井二郎動くな、お前には俺がついている。」私はトランシーバーに向って涙声でどなった。

萩原君はどうなったのだ。彼はガンガプルナで他界した笹川君の妹婿だ。私は誰よりも彼を生かさなくては。とに角 2人が別れてから未だ30分だ。動きさえしなければ何とかなるぞ。そうむざむざ落ちるような萩やんやないでェー。

全く幸運なり。天は我を捨てず。次の一瞬あれ程のガスが切れ間をみせた。今井二郎はフィックスの始点近くに、萩やんは50m程下にシェルトを破っているのが我々の目に入った。「今井二郎、フィックスを摑め、萩原はお前のすぐ下にいる……。」無線機にどなるのも、もどかしい私でした。

フィックス・ザイルの下端に集ったアタック隊と $C_3$  のメンバーは、もみくしゃになって、泣き笑いの涙や鼻水が一緒になって、雪の斜面で抱き合ってしまいました。6500mでの男のドラマだったのでしょうか、それは。 (ベース・キャンプにて隊長 清水 澄)

#### | |月明りのバムチュー(6303m)

#### B. P. S. フンダル中尉(リエゾン・オフィサー)

バムチューという山の名を, 私は聞いたこと もなく、ましてや登ることになろうなどとは考 えてもみなかった。コン(訳注,今野隊員の愛称) は日本へすぐに帰らなければならない身であっ たが、登山家が山登りをせずに帰られるもので はない。"日出ずる国"へ帰る前に、どこでも よい、一つの山に登ろうと考えるのは当然すぎ る程当然に思われた。コンはそれを私と一緒に やりたいと心の内を打ちあけたが、私にとって はむづかしい決断をせまられることになった。 私は"繁文縟礼"にしばられていたし、官僚気 質としては安全快適なBCに滞在して、冒険へ の処置をしていればよいからであった。しかし, インドの慣習的伝承に「客は君の神なり」とい う。結局慣習が官僚主義にうち克って, 私はコ ンの要求を容れることにした。

1975年9月16日、私とコンの2人の登山家はウッタル・リシ氷河を横切ってウッタル・リシ氷河とウッタル・ナンダ・デビ氷河の出合に着いた。小さな流れが2人を歓迎し、私たちはこの美しい谷の奥を探険することに心をおどらせながら休憩した。ABC建設に向って、小川沿いに登りつづける。コンは9月22日には日本への帰途につかなければならないので、期間は非常に短かいものであった。雨と雪とが、5500mへ登ってABCを作る私たちを迎える。ABCを定めた後、一旦BCに引き上げる。

9月17日は晴天で、私たちはポーターのナライン・シンを加えて再びABCに登り、快適な夕食と睡眠をした。翌18日朝、私は激しい頭痛に悩まされたが、それは多分ストーブをテント内で使ったせいと思う。コンは少し失望しながらナライン・シンを供なってバムチューに向けて出て行ったが、夕刻彼らは頂上に到達出来ずに戻って来た。

9月19日も頭痛は残っていたが、ナラインが 行くことを拒否したので、私は有無を云わずに コンに同行しなければならなくなった。午前4 時30分過ぎ、私たちはラテルネをつけて出発す る。一歩一歩が努力の連続であり、激しい頭痛 と腫れ上った手首が私の仲間になる。だが、あ まり愉快な仲間ではない。5時間の登高で頭は まるでアフリカのブーズー教のドラムを叩いて いる様だ。難儀はこれでもまだ充分ではないか の如く, 山稜上を横切る大口をあけたクレバス に迎えられる。あたかも私たちの挑戦をあざ笑 うかの様に感じられる。急な側面を下って登り 返す。少し気温が昇り、熱が出て来たらしく, 第三ピークの頂上で休む頃には、頭痛と手首の 腫れ上りは更にひどくなった。私たちはバムチ ュー頂上に最終照準を合わせるのだが、一歩を 出す度に, これで私は倒れるのではないかと思 った。最後の登りに向って私はコンに頭痛薬を 所望した。頂上を凝視する私の耳に親しんだ言 葉が甦える。

「何故なんて尋ねることはないんだ。 それをやりとげるか死ぬかだ。」

最後を見上げながら、空中に高く高くヌーッと現れ出ている危険なナイフ・エッジをのろのろと登る。コンは常にリードしながら遂に頂上に達した。喜びと満足、写真、HAAJ旗とインド三色旗が頂上に立てられ、少しばかりの神への供物が無事を謝して雪の中に埋められた。時



BAMCHU 6303*m* (右)と DEO DAMLA 6620*m* (左) ルートは右手の稜線を忠実にたどっている

に午後3時。帰らなければならない。ゆっくりと着々1500mのナイフ・エッジを下る。コンは紙片に何やら書きつけ、私にも同様にという。

「忘れ得ぬ体験」

と書いた。コンはそれをポリ袋に収めて標石を積んだ。すぐに ABCの灯りが見える様になり、私たちは斜面を駈け下り、午後 8 時無事 ABC の人となった。コンは幸福感にひたり、私も同じだ。ナラインも興奮し、バムチュー、空高くそびえる6303mのすべてについて知りたがった。深い眠りから醒め、9月20日帰途につき、再びウッタル・リシ氷河とウッタル・ナンダ・デビ氷河の出合いに着くと、コンはウッタル・ナンダ・デビ氷河の源頭を訪れたいと望んた。疲れていたがルック・ザックをそこに置いて私たちは約2時間、氷河の奥を探険した。

BCに帰着すると残っていたポーターらがやんやの歓迎をしてくれたが、私はコンの心が山を去る悲しみに沈んでいることを感じ、その眼が寂しさにうるんでいるのを見た。コンは大変

センチメンタルになって、ロキシーを夜中の1 時までも飲んだ。

翌朝10時、BCを去る用意ができると、コンは"HAAJの湖"のほとりに行き、そうすることも最後の、顔を洗い、そして誰か現れるだろうかと北のウッタル・リシ氷河の方向に見入っていた。それは稲田副隊長から、多分能勢ドクターがBCに下ることになろう、と書いたメモが来ていたためであった。遂に誰も来ないと知ると、コンは悲しみに沈んでBCを去りにかかった。最後の写真を"今野気象観測所"の傍で撮り、彼は腕時計を記念のために交換しようと云った。さょうなら。握手。神のご加護を!

2人の友は今は別れなければならない。2ヵ月の親しい交友は、国籍とそれぞれの社会の宗教と法律によって引き離され、多分二度と再び逢えることもないだろう。顔には出さずとも互いに心で泣くのか! 親愛なるコン。グッド・バイ。 (訳 隊長 清水 澄)

#### バムチュー登頂のいきさつ

今野隊員が勤務の関係で中途帰国しなければならないことは、残念ながら止むを得ないことであった。単独行動の可否をIMFの判断にまたねばならない事が判った時、むしろ全隊員は喜んだものだった。こうしてキャラバンを続けBCに到着した私たちはそこの素晴らしさに、是非今野隊員も手軽な一峯を登って帰るべきだと勧めた。勿論彼も大乗気であった。チャンガバンのABCを撤収する時、カランカの尾根上の一峯をトライしたが、結局登頂には到らなかった。この様な手軽な山を登ろうとする時、あまり事大主義な考えを持つと自ら潰れてしまう様である。

ウッタル・リシ氷河にABCを作り、隊の主力が移ってしまった後、バムチューを狙うことがBC滞在者の間で云われていた。しかし、6992峯への作戦展開途上にあり、メンバー、ポーターに余裕がなく、バムチュー攻略は、荷上げ、事故対策の両面からおぼつかないものであった。ところがリェゾン・オフィサーのフンダル中尉が登攀に加わり、2人だけで総てまかなうので、是非登らせ

て欲しいということになった。フンダル中尉は絶対コンも頂上に立って帰国させるべきだと云って来た。

私は、バムチューの高さとむづかしさ、フンダル中尉の登攀経験と体力、現在の気象状況などから考察して、可能且つ安全と判断し、去就については今野隊員に一任すること、但し、緊急事態にそなえて最も有能なポーターのナライン・シンを連れて行っても良いことを連絡した。この間、今野隊員と直接会っての話が出来ず、多少のもどかしさはあった。

いずれにしても隊として、今野隊員にも一つの 頂上を持って帰ってもらおうということが基本で あった。この様にして未踏の6303mのバムチュー は私たちの山となった。登りつくされたガルワー ルなどと、ものの本に云われるが、6000m級では まだまだ沢山の峯が未踏で残っており、軽快な考 えがバムチューをものに出来る元になった。

(隊長 清水 澄)

### `ナイス・ガイ<sub>></sub>われらのリエゾン・オフィサー

IMFが私たちの遠征隊につけたリエゾン・オフィサーは、B・P・S・フンダルという24才の青年将校であった。彼はシーク族で背が高く、ターバンを巻いてはいたが、オートバイに熱中する若者であった。アグラに駐屯する陸軍落下傘部隊に所属し、遠征時正確には中尉であったが、12月には大尉に昇進が決定しており、彼のオフィサーズ・メスを訪ねた時など仲間がキャプテン、キャプテンと呼んでいた。落下傘部隊はどんな土地にでも作戦で下りなければならず、山岳戦への必要から登山を始めたらしい。日常、機で5~6000mに昇っているので高所順応は出来ていると話していた。職務には非常に熱心且つまじめで、遠征隊の雑事をよくさばいてくれた。

よく報告書などで、インドのリエゾン・オフィ サーは非常に頂上へ立ちたがるのに, いざその場 になると全然だめだと云われているので彼も同様 かと思っていた。しかし、キャラバン初日、一緒 に歩いてみてこの考えは間違っていることを感じ た。隊員の中にはキャラバン中に使うべき個人装 備までポーターの背に委ねる横着者もいたが、フ ンダル中尉は一切の高所装備まで全部自分で背負 って、しかもこちらから休もうと云わない限り、 疲れた様子もみせず元気に歩き, その上必ず殿り をまとめていた。さすが有能な軍人だわいと, イ ンド軍隊への評価も一辺にはね上ったものだった。 彼は、国防省からの服務命令ではBC以上に登っ てはいけないと云われているが、「リーダーが要請 するならば何処にでも登る, 国防省は山の中まで 来ているのではないから」と、なかなか愉快なこと を云っていた。その彼が中途帰国せねばならない 今野隊員に同情して, 忙しくて相手になっていら れない隊員の代りに同行し、自己の悪コンディシ ョンを口に出さず、6303mものバムチューをほん の短時間でやったのは, 立派というの他ない。

チャンガバンから6992m 峯などへの転進は困難なことが予想されていたので、如何にしてリエゾン・オフィサーを云いくるめるかなどと良からぬ考えを抱いていたが、彼の誠実さに、こちらが見すかされている様で気が咎めた。ニュー・デリーに戻

ってこの件で隊長には一言の質問もなかったのに、彼は両3日も国防省で事情を聴収され、今までに この様なケースはなかったとかで大分油をしばられたらしい。彼の信条は、「我が客人は我が神」 というもので、真から私たちの満足ということを 考えてくれた。それだけに私たちも心からの友となり、彼の昇進もふいになりはしないかと心配したが、彼は意にかけない風であった。

郷里のアムリッツアーには70エーカーの農園を持つという彼。話ずきでいつも隊員を笑わせながら国家、政治、軍隊、文化、機械からスカイ・ダイビング、オート・レースなどまで尽きることを知らない話題であった。日本人でもなれるとシーク教の本分を話してくれた彼。遠征隊終了後、全員をアグラに招待し、見も知らぬトレッカーまで日本人だということだけで、私たちの仲間として処してくれた。

こんな彼を一度もウッタル・リシ氷河の奥へ登 らせてやる機会のなかったことが、心残りと云え ば心残りである。 (隊長 清水 澄)

#### ~~~お礼のことば~~~~~

1975年に日本ヒマラヤ山岳協会から送り出した 2つの遠征隊はこの帰国報告書に概要を述べましたように、それぞれの成果を得て全員無事帰国いたしました。これもご協力ご支援いただいた皆様のお蔭と深く感謝いたします。

カンジロバ(ネパール1972年), ラムジュン(ネパール1973年) に続く HAAJ としての本格的遠征隊でした。今後もますます発展していく会でありたいと思いますので、より一層のご支援をお願いいたします。ありがとうございました。

HAAJヒマラヤ委員会・遠征隊一同

会 長 柴田金之助(HAAJ会長) 副 会 長 善行 久 親( " 副会長) 委 員 長 増田 秀穂( " 専務理事) 事務局長 小島守夫 遠征隊本部 植竹清孝 委 員 山倉洋一,菊池 薫,鈴木康志, 沖 允人,近藤龍良,稲田定重, 清水 澄,西部光昭

# 一海外トレッキング・登山は専門スタッフにおまかせください



インド大陸、中近東方面へ当社独自のプランをいたしております

ツアー名

- ★シルクロード 6,000キロ
- ★ネパールとアフガニスタン
- ★砂漠の国アフガニスタンと 最後の桃源境フンザ
- ★大ペルシヤとアフガニスタン

---お問い合わせは下記まで-

# (株)トラベル日本

〒100 東京都千代田区有楽町 2-2-1 ラクチョウビル5F 電話 (03) 572-1461 担当—— 外池・永瀬・月候・小島

# 海外登山、トレッキングに傷害保険を

あなたの所得を補償する保険をご存じですか? (所得補償保険) ● 所得補償1~5年, 傷害特約60~120倍までいろいろあります

自動車・火災・レジャー(山岳保険・国内旅行・つり・ゴルフ・ヨット)・普通傷害・利益 ・生産物等の私達の生活に関連した保険を取扱っています。岳産業の西田までご連絡下さい

大正海上火災 岳 産 業 大阪市淀川区西中島町 5丁目第3チサン10F 6号 〒532 保険(株)代理店 産 業 ホルスノトキー大正海上十三営業所 304-5774

# ヒマラヤの旅はヒマラヤのヨロズ屋へ

# **EXPRESS TREKKING**

トレッキングからエクスペディションまで全て引き受けます。

装備貸出・シェルパ斡旋・現地食料調達 国内外輸送手配・別送貨物通関・ヒマラヤ情報……

# EXPRESS TREKKING(P) LTD. EXPRESS HOUSE

NAXAL BHAGABATI BAHAL P.O.BOX339 KATHMANDU NEPAL 電略 GREATREK·KATHMANDU TEL.13017

# **EXPRESS HOUSE**

カトマンズの宿泊はEXPRESS HOUSE をご利用ください。

家庭的なムードで宿泊代も安く気軽に泊れる宿です。 特に日本のお客様には大浴場が好評です。自炊もで きます。 宿泊代—1泊朝食付30RSから ※長期滞在者はご相談に応じます。

# 日本語でお問い合せください

編集「ビマラヤ」編集委員会発行者、柴、田、金之助発・日本ビマラヤ山岳協会

東京事务所 ▼ 名古屋事務所 ▼

こうの 東京が中野文中央三丁目の十年四六八 名古屋市天白区一つ山一1四十四八一日発行 通券第五十二号 定価 エ

1十八 - 尺本之心 1 F